

## 【問題】(演習)

出典…大森荘蔵『新視覚新論』／オリジナル問題

## 文章略解

記憶という概念は、その対象となる事柄の存在を暗示し、事柄自体とその記憶という二重化された構造を印象づけるが、想起が事柄を直接的に思い出す行為である以上、事柄とその想起の媒介物としての記憶像は存在する意味がない。人間の事象の把握には多様な様式があり、現在知覚的に認識することは不可能でも、論理的考察の上でその実在が必然化されている事物と同様に、過去の記憶も決して過去の事件の複製物ではなく、想起という様式で、現在の実在として現象しているのである。

## 解答

- (一) 記憶という概念が、その対象となる事柄の存在を暗示し、事柄自体とその記憶という二重化された構造を印象づけるということ。
- (二) 想起が事柄を直接的に思い出す行為である以上、事柄とその想起の媒介物としての記憶像は存在する意味がないから。
- (三) 実体性の稀薄な印象を持つ想起行為と、想起体験の実感の強さとの懸隔を解消するための要素が必要と感ぜられるから。
- (四) 人間の五感によって知覚することはできないものの、論理的考察の上でその実在が必然化されているということ。
- (五) 人間の事象の把握には多様な様式があり、過去の記憶も、現在知覚的に認識することは不可能ではあるが、決して過去の事件の複

製物ではなく、想起という様式で現在の実在として現象しており、その点で過去を既に存在しないと考えるのも誤りであるということ。<sup>[119]</sup>

(六) a || 停泊 (碇泊)      b || 端的  
c || 毛頭      d || 短絡  
e || 幾何

出典：慶政『閑居友』下六「唐土の後の兄、侘び人になりて、かたへを育む事」の全文 / オリジナル問題

## 現代語訳

(私、慶政が) 宋の国に(行って) おりましたときに、(むこうで) ある人が話したのは、(こんな話があったのでございます。昔、その中国の(ある国の) 王さまのお后の兄にあたる人がいたそう。その人は) 急に出奔して、あちらこちらと、居場所も定めずに(世捨て人として流浪の生活を送って) いた。(ところがその人が) 貧しくみすぼらしい格好をしていたので、(周りの) 人々も(そのみすぼらしい男が) 誰だとも見分けがつかなかった。(都から) 遠く離れたところでは、何かにつけて、つらく面倒なことばかりであった。(その人の) 妹のお后は、(兄上を) やつこのことで(探し出して) 呼び寄せて、いろいろと説得して、「これからは、どうか身を落ち着けていらしてください。(お兄さまの御身分に) それ相応な(衣食住のお世話の) ことも考えて差し上げましょう」と申し上げたので、(兄上も)「そのとおりにいたしますよ」と(いつ)て(しばらくは) じっとしていたが、(そのうちに) また、人目(のないとき)を見計らって逃げ出してしまった。(それでも妹の后はなんべんも兄を探し出しては慰留したのだが) このように(兄が出奔)することが度重なったので、后も、この(兄に身を落ち着けてもらうという自分の願いを実現する)ことは無理だと思つて、あちこちの地方地方に命令を言いつけて、「身分の低い困窮している人がさまよい行くようなことがあつたら、必ず泊めてやり、食事も心配りして、親切に待遇するように」と(いう御命令が) ございましてのです。そんなわけで、その(后の兄という) 人ひとりのために、たくさん困窮者がみんなそのお蔭をこうむつて、面倒なこともなくて、みんな喜んでいたとね(、そんなことがあつたという話でした)。そんないきさつで、(私が中国におりましたときにも)、その(后の兄という人の) 肖像を絵に描いて、しみじみと有り難がり、尊敬して、(向こうの) 民衆はみんな持っていた。

「ああ、今すぐ売りに来てくれ。(私が) 買いつつて(対価を) やろう」と(私は) 言ったものだ。(その肖像画は) 乞食の格好をして、頭には木の皮を帽子にして、竹の杖を突いて、藁沓を履いた姿(に描いてある)と(いうことだった)。

こ(の話)は、その当時、世の中に困窮している人々が多くて、(あまりの乞食の多さにその乞食たち自身が) 何か乞うこともできず、困つて歩き回っていたのを見て、その(困窮)者たちを助けるようなことのために、このように(后の兄という身分の高い人がわざわざ

ざみすばらしい身なりをしては) 歩きまわっていたのであったのだなあ。本当に、滅多にないほどすばらしい慈悲の心であるに違いない。人というものは往々にして、(まず) 自分が豊かになってから困っている人に憐れみの心をかけようと、いざれそうするつもりでいるようだ(から、実際には自分がよほど豊かにならない限り他の人によくしようなどとは思わないことが多いものだ)が、こ(の話)は実に深い慈悲の思いのあふれた現れだと思われて、本当に本心に尊いことだと思います。(後の兄という方は)今はどこの国に生まれ変わっていらっしやるのだろうか。(是非お会いしたくなるくらいに)慕わしいことだと思います。

(注) わが国では「唐」もろこし」という言葉を慣用的に「中国」の意味で用いるため、文中では「唐土」となっているが、この作品の書かれたころ、中国の王朝は「宋」であった。

また、古語「おとうと」は「親を同じくする年少者」の意味で、古くは男女ともに用いられることがあった。「おとうとの后」が「主人公の弟である王の后」ではなく「主人公の妹にあたる后」の意味であることは、問題文冒頭で明らかである。

### 解答

(一) イⅡ兄を都に落ち着かせることはできないだろう

オⅡ将来の予定にもするようにみえるものだが

カⅡ心の底からの慈悲が表にあふれた行為

(二) 人々は誰も後の兄を王族とは思わなかったということ。

(三) (ア) ああ、今すぐその後の兄の肖像画を売りに来てくれよ

(イ) 作者が慈悲深い故人の話聞いて感動し、その肖像画が欲しくなり、また自らも施しをしたくなったから。

(四) 後の兄ともあろう人が、ことさらにみすばらしい身なりをしては、国中をさすらって歩いたのだなあ。

出典：増田四郎 『都市』「I 都市とは何か」の一節 / オリジナル問題

文章略解

都市はそれぞれの民族の固有の歴史の中で形成されてきたものであり、都市とは何かという問いに対して人口や行政区分、特定の機能の有無といった単一の基準を用いた普遍的な定義をすることは困難である。むしろ人々の営みのなかで、何が「都市」と考えられてきたのかを歴史的にたどり、その意味を社会学的に理解する努力が重要である。

解答

- (一) 都市を概念的に規定する基準となる要因は、個々の時代や民族に応じて異なってくるものだから。
- (二) 都市とは数的な要素で規定されるものではなく、発達の歴史的な経緯によって規定されるものだから。
- (三) 行政上の人為的な区分ではなく、人々の共同生活を円滑に運ぶために自然発生的に形成された集落。
- (四) 都市の形態的な把握にとどまらず、各時代や民族ごとの、人々の営みの中で都市を作る意識を捉えようと考えること。
- (五) a 〓 市制      b 〓 該当      c 〓 散在      d 〓 概観

解説

(一) 理由説明の問題においては、この設問のように「〇〇は××である」のうちの「××である」の部分(述部・結果にあたる部分)にしか傍線が付されないことが多い。このような際には、まずはその「主語」なり「条件」なりに相当する部分を捉え、解答に織り

込むことを考えよう。ここでは、傍線部分の主語にあたる部分「都市とか町とか……」一つで概念で規定すること」に相当する内容がまずほしい。要は「都市の概念規定」ということだ。

ではそれがなにゆえに「きわめて困難」なのか。これに関しては続く段落での記述を追っていけばいい。「きわめて常識的に考えて……」以下では「人間が多数が集まって日常生活を営んでいる場所」という概念規定を試みているが、これは結局のところ「人口の規模ということ、もとより都市を規定する基準にはならない」と否定されている。続いて「聚落の形態」などが取りざたされるが、結局は「これらの理由のどれをもって都市の決定的な要素とするかということ、容易に断言できない」となっている。というわけで、解答の手がかりはさらにその次の段落になる「それは歴史の各時代あるいは各民族に応じて何が『都市』と考えられたかというその基準が違っている」以下のところから、エッセンスを抽出して解答を作っていけばいい。「基準が違っている」からこそ「一つで概念で規定できない」のだ。解答の核はここになる。

(二) (一)同様、まずは「主語」「条件」に相当する内容を押さえることだ。これについては簡単だろう。直前の「人間が多数が集まって日常生活を営んでいる場所」という概念規定を指している。要するに「数的要因で都市を規定しようとする事」である。

ではそれがなにゆえに「問題の焦点がそれてしまう」のか。それに答えるためには、「問題の焦点」を指摘してやればいい。この「焦点」については、(一)で検討したところから明らかであろう。第四段落以下の内容に注目すれば、「都市」とは「要するに、きわめて歴史的な形成体であったということになる」のである。この「歴史的な形成体」であるということについては、さらに次の段落で、「東洋特に日本の町」についてのいくつかの例が挙げられている。解答としては、これらの性質を抽出してやることを心がければいいだろう。要は「歴史的な成立経緯」といったところか（これについては(四)の解説部分で再検討する）。ここではこれに相当する内容が含まれた解答ならばOK。

(三) 傍線部分が、直前の「行政の単位としてつくりあげられた自治単位」「行政の必要上政府から認められた自治単位」という表現と対比されていることに注目。要するに「自治体」と言っても、現在の日本における地方自治体のように、上からの行政を遂行するための単位ではないということだ。

ではどういう意味で「自治体」なのか。3行前の「自然発生的な自治体としての村」という表現に注目すれば解答の核はできよう。

「自治」とは元来、「自分たちで自らを治める」ということ。「人々の生活を治める上で自然発生的に生じた」という旨の指摘がほしいところだ。

④ 「その努力」の指示内容は、直接には直前の「それが持っている社会学的な真の意味を理解する」努力、ということだ。この内容をわかりやすく説明することが設問では求められているわけであるが、ポイントは以下の二点になるだろう（該当部分の表現の性質から、このように具体的な解答のポイントを導けるか否かが得点力を左右する大きなファクターである）。

① 「それ」とは何を指すか

② 「社会学的な真の意味」とは具体的にどういうことか

①については比較的簡単だろう。直前にある「歴史的な形成体としての都市を正確に理解」ということだ。ただ、ここで注意してもらいたいのは、「その前提の上で」という表現である。この表現をきちんと読むならば、②は①の延長線上にある作業だということになる。

では②とは何なのか。ここで「この事情をうかがうために……」以下の具体例について突っ込んだ検討をしていく必要が生じる。ここで挙げられている「この事情」とは、「政治の中心であって都城という形で発達したもの」・「ある寺社に関連してできてくるいわゆる門前町」・「封建諸侯のお城の周囲にでき上ってくる城下町」・「大きな街道にできる宿駅都市」・「商業を中心にできてくる……港湾都市および市場都市」……といった二連の例は、政治・宗教・産業といった人々の営みから説き起こされている。平たく言うならば「人々がどのような営みの中でどのように都市を作っていたか」ということだ。これが②で言うところの「社会学的な真の意味」ということになるわけだ。解答にあたってはこの旨の指摘がほしい。解答例ではこれを「人々の営みの中で都市を作る意識」としておいた。

ここまでできれば、①の意味も再検討されてこよう。「歴史的な形成体としての都市」を理解する、とはこうした「人々の意識」に踏み込む前の段階であるということだ。このあたりを明確にする記述もあっていいだろう。解答例では「歴史的な形成体」の「体」（＝すがた・かたち）というところに着目して、「形態的な把握にとどまらず」というふうに言い換えておいた。この旨の指摘もあつた方がいいだろう。いずれにしても、問題文の構成をきちんと見抜き、それぞれの解答の中心にはどの部分の記述が相当するのかわよく見きわめていくことが重要だろう。

## 現代語訳

冷泉為秀さまの、

あはれしる……情趣を解する心の通じ合った友というものがなんと見つけにくい世の中であろう。ただひとり雨の降る音を聞いていて秋の夜長を一晚中そう思つて過こしたことだった

という和歌を聞いて、(わが師匠)今川了俊さまは為秀さまの弟子におなりになったのである。(さてこの歌の)「ひとり雨聞く秋の夜すがら」という部分は、(下の句と言ふよりもむしろ)上の句(というべきところ)であるのだ。秋の夜長にたった一人で雨(の降る音)を聞いて、「あはれ知る友こそかたき世なりけれ」と思つているのである。雅びな心を共感できる友がいるなら、(その人に)誘われて、どこへなりとも(風流なところへ)行つて、(その人と)語り明かしてもすれば、このように(独りぼっちで)雨音など聞くはずがない。(中途半端な友達など求めようとせず、その程度の友人のところへなど)行こうともしないところがしおらしく思われるのです。「ひとり雨聞く秋の夜半かな」とでも(詠んで)あれば(それで意味が)切れるのは当然だが、「秋の夜すがら」と言い放つて(意味が)終わらないところが重要である。「ひとり雨聞く秋の夜すがら、思つたことには」という気分を(余情として)残して、「夜すがら(「||」一晚中)」と言つたのである。そんなわけで、「ひとり雨聞く秋の夜すがら」という部分が上の句なのだ。「ひとり雨聞く」が(そのまま)下の句(として解釈されるような詠み方)ならば、別段たいしたことない歌であると言わなければならないだろう。(ちなみに、「雨聞く」で思い出すのだが)杜甫の漢詩に、「雨と聞きて寒更尽き、門を開きて落葉深し」という詩がある。(その詩について、私の修行仲間の大先輩の僧がいたのだが、(その人が)訓読の仕方を訂正した(ことがあった)ものだ。昔から「雨と聞く」と訓読してあるのを見て、「この読み方は間違つている」といつて「雨を聞く」とたった一文字を初めて直したのだ。たった一文字の違いで、天と地ほどの差(が生まれるの)である。「雨と」と読んでは、もともと(雨音ではなく)落葉の音なのだとかつていた(という解釈もできる)のであつて、その詩としての境が浅い。(ところが)「雨を」と読んでやると、夜の間はただ本当に雨音だと思つて聞いていて、もうすぐ夜明けだという早朝になつて門を開いて(庭に)目をやると、(実は夕べの音は)雨音ではなく、落葉が深々と(庭に)散つ



ている。その時初めて気がついたという趣きこそ風流というものだ。そういうこと（もあるくらい）だから、和歌もたった一文字の違いで、まったく別のものに聞こえるのである。

### 解答

(一) アⅡなかなか得がたい世の中

ウⅡ特にこれといった風情

エⅡ読み下し方を改めたのである / 杜甫の詩に訓点を付け直したのである〔別解例〕

カⅡまったく異なる趣き

(二) 結句の後に「思ったことには」という余情を残しており、実際の上の句と倒置されていることになるから。

(三) 「雨と」では夜のうちに落葉とわかっていたことになり情趣が浅いが、「雨を」なら夜明けに初めて落葉の音と気付くことになり趣きも深まったということ。

### 解説

(一) アについて。「かたき」は形容詞「難し」の連体形で、「むずかしい、容易ではない」という意味。したがって、何が難しいのかという内容を具体化することがポイントである。主語が「あはれしる友こそ」であることから考えると、「情趣を理解する友を……が難しい」の「……」の部分具体化させればよいとわかる。ここでは、下の句（筆者の主張によれば実質上の上の句）に「ひとり雨聞く」とあるので、友だちを得られないことが読みとれる。したがって「……」の内容は、「得る・探すが難しい」ことになる。

ウについて。東大古文の短い表現の現代語訳には、慣用句的なものもしくは出題されている。ここでは副詞「さ」の内容を文中に求めようとしても、適切なものがない。「させる」は「副詞＋サ変動詞未然形＋《存続》の助動詞連体形」である。《存続》の助動詞には「たり」もあるので、これと置換すると「さしたる」という、現代語にも生き残っている書き言葉となるので、これを参考に

するとよい。「ふし」は「節」で、直接には歌の表現のことを言っているが、傍線部の後とのつながりを見ると、「表現がない」では不自然なので、表現にこめられた「情趣」のことを言っていると考える。

工に関しては、「点ず」という動詞の訳し方がポイントである。「点」を動詞として読むために、サ変化している（サ行で読んでいるのは「御覽ず」などと同様に直前が撥音であるため）。この文脈の「点」とは、漢文にかかわるものであるから「訓点」のことだと推察し、それを「直す」にうまくつなげればよい。ここでは具体的に送り仮名をつけ直しているわけだから、「読み下しを改める」ぐらいでもOK（「訓点」とは返り点・送り仮名を意味する）。

カもウと同様、慣用句に注目した問題である。「あらぬ」が「あり」の主体を明示せず、連体修飾語となっているときには、「まったく別の」の意味になる。「存在しない」などと考えると、かえって意味不明となるので要注意。ちなみに、人間を主語として「あり」が用いられるときは、「存在」ではなく「生存」を意味することもある。またこのような意味のときには、「ありやなしや」などと、特に「なし」との対比の形になることも多い。

(二) これは、四行後に「されば『ひとり雨聞く秋の夜すがら』が上の句にてあるなり」（7～8行目）と繰り返して確認されていて、しかも「されば」と理由説明の形になっていることから、その前の部分をまとめればよいことはすぐにわかるだろう。しかし、現代語訳の問題ではないのだから、文中の語を表面的に現代語で表現するだけでは不適切である。性質を抽出することを心がけられたい。問題文は室町時代のもので、冒頭の歌の解釈の仕方をくどいくらいに説明しているが、なぜくどく感じるのかという理由の一つに、漢語による修辭技巧の説明がないからだということが挙げられる。幸い私たちは、和歌の解釈に際しては修辭技巧に着目するという習慣を持っているのだから、現代の修辭用語のうちから筆者の説明する内容にあたるものを捜してみる。

まず、『秋の夜すがら』といひ捨ててはでざる」（6行目）は明らかに《体言止め》の技巧であり、この技巧の目的は筆者も「心を残して」と述べているとおり「余情を醸し出すこと」である。また「ひとり雨聞く秋の夜すがら思ひたるは」として上に返って解釈すべきだとの主張は、とりもなおさず《倒置》のことである。一般に、和歌において途中に《句切れ（＝散文の述語）》があつて結句が述語の形になっていないときは、倒置法が使われていると考えるとわかりやすい場合が多い。

(三) 「点」は(一)の工でも見たとおり「訓点・読み下し方」のことである。「悪し」は「あし」と読むべきか「わるし」なのか吟味すべき

ところだが、漢文の読み下しに関することなので「誤っている」と考えればどちらで読んでも結果的に同じである。どう間違っているのかといえば、韻文の解釈のまちがいは原文にこめられた詩想を生かすきれない読み方に決まっているから、設問文「直した結果どうなったというのか」からも、訓読の訂正の前後をくらべて詩想が深まっていることを述べればよい。問題文の後ろから二つめの文の「面白けれ」（13行目）が「情趣が深まった」と解釈できることから、解答欄を有効に使って、「雨と」と読むときと「雨を」としたときとの詩想の違いを説明する。